

// 卷 頭 言 //

日本ライトハウス視覚障害リハビリテーションセンター
所長 市川 としみ

私は今から30数年前に国立大阪病院附属視能訓練学院（今は閉院されています）を卒業し、視能訓練士の業務に就いていました。視能訓練士の現在の主な業務は、①視能矯正②視機能検査③健診・検診④ロービジョンケアの4つですが、私が学院で学んだときは、①と②が中心で④の「ロービジョン」という言葉すら意識が薄く、弱視眼鏡・単眼鏡を見たことがある程度でした。

低年齢の小児の視能矯正では、視機能検査をし、弱視や斜視に対しての視力向上や正常な両眼視機能の獲得を目的とした視能訓練を行います。ここでいう弱視はLow Visionではなく amblyopia（医学的弱視）です。正常な視機能の発達を阻害する要素を視機能検査の中で発見し、視機能が完成する6歳～8歳ぐらいまでに眼科医の指示のもと治療・訓練をすすめていきます。早期発見・早期治療により、視機能の発達を促すことができるので、視力検査が検査可能な年齢になる前の就学前健診・3歳児健診の導入に力を入れました。ランドルト環で測定できない幼い子どもの視力を蝶や魚の絵指標を使って測る方法など、保健所の保健師や看護師に講義をしたことが思い出されます。

勤めて4、5年たった頃、勤務していた医院の先生が身体障害福祉法における眼科の指定医で、身体障害者巡回相談の担当をされていて、私も参加させていただく機会がありました。眼科での仕事のほとんどが小児の視覚についてと矯正視力を測定できる患者の検査をしていた私にとって、視覚障害をはじめて認識した場所でした。まだ視野障害については損失率の考え方がない時代で、視力検査と先生の眼底検査で手帳の申請がされていたという印象があります。その後、診察を受ける患者の中に網膜色素変性症の方が多く、視覚障害を持たれた方がどのように生活されていくのか、私はどのように患者に接したらよいのかに疑問を持ったこ

とが、視覚障害者に対する歩行訓練への興味へとつながっていきました。

そして、地元には歩行訓練士がいないということが私の背中を押し、日本ライトハウスの門をたたきました。視覚障害についての知識がまるでなかった私が、視覚障害者への歩行訓練指導者養成課程を受講し、日々新鮮な驚きをたくさん得て、地元に戻る手前でUターンし、日本ライトハウスの職員になったのが20年前です。

今は視能訓練士の4番目の仕事としてロービジョンケアがありますが、日本ライトハウスに勤務し始めた頃の頃、視覚障害リハビリテーションの世界にはすでにロービジョンケアがあり、当時の眼科の認識より進んでいると感じました。私も必死でロービジョンケアに取り組み、私を育ててくれた先輩やたくさんの方のおかげで勉強させていただきました。

今では、視能訓練士の世界でも、手帳の交付を受ける前からケアが始まり、ロービジョンケアが身近なものとなっています。私の所属も「職業・生活訓練センター」から「日本ライトハウスきらきら」へと事業所名も変わり、日本ライトハウスでのロービジョンケアの役割も変わってきています。

私も4年前に管理部門を兼務するまで訓練部門を担当させていただきましたが、今は利用者の方の声を聴く仕事から職員の声を聴く役割に変わってきました。視覚障害を持った方がどのように生活していくのだろうかという疑問の答えも年月を経るごとに変化しています。これからの日本ライトハウスの役割を、職員とともに考え、実践していきたいと思えます。